

〔センター15周年・研究科10周年記念号によせて〕

## ほどよい明るさ、広さ、暖かさ、〈ゆとりの空間〉

### —札幌学院大学心理臨床センターの思い出—

京都光華女子大学人文学部 徳田仁子

#### はじめに

札幌学院大学心理臨床センターのある空間は、私にとって特別な場所である。おそらく自分というものが育てられた場所は、明るく元気で健康的なだけではなく、ちょっと切なく苦い思い出も含んでいる場所なのだろうが、不思議と良いことしか思い出さない。

江別市の自然に囲まれたこの土地は、とりわけ清浄な空気と共に、大らかに人を育て、しっかりと根づいた活動を可能にする母胎なのだろう。心理臨床センターの、明るく、広々とした窓、白を貴重とした各部屋の様子を頭に浮かべると、受付の非常勤相談員の方々の暖かな声が聞こえる様な気がする。センターの面接室の窓から見える景色は、桜や紅葉そして雪など四季の変化のスケールが大きく、窓の外にしばらく見とれてしまうこともあった。センターに来られるクライアントも清浄な空気に包まれた道をたどって来られる。子どものクライアントが吹雪の中を走ってきたり、老夫婦が肩を寄せながら凍った道を歩いてきたりするのを迎えながら、それぞれセンターに新たな出会いを求めて来られていることを実感する。センターで経験した様々なできごとは、時には野鳥の啼き声も聞こえるような「自然を背景にした空間」とともに思い出される。気持ちが溢れてなかなかまとまらないが、そのかけがえのない思い出の一端を綴ってみたい。

#### 研究科の思い出

札幌学院大学大学院臨床心理学研究科は、臨床心理士資格認定協会の第一種指定校として認定されている。その責務として、大学院生の実習の施設として、有料でカウンセリングを行う実習施設を学内に持ち、実習生のために他者理解と自己理解を深めるためのスーパーヴィジョンの場を確保しなければならない。札幌学院大学では、大学院と並行して人文学部臨床心理学科も開設されたので、われわれ教員の授業時間数はかなり多く、限られた時間内で大学院生とケースを担当することになった。学んできた臨床心理学は「学問」というよりは「アート（技術・技能）」に近い。そのためには、何かを教えるというよりも、大学院生と一緒に時を過ごす機会をなるべく多く持ち、私自身が人に関わることによって理解しようとする努力を共にすることによって、アートが伝わることも多いのではないかと思われた。スーパーヴィジョンについては、本学以外の先生にお願いしたケースも多かったが、ケースの特性として現場を良く知っていることのメリットを生かした方が良いことも多く、大学院生が本人を担当し、私が家族面接とともにスーパーヴィジョンを行うことも多かった。

授業では、修士一年生の「臨床心理学面接特論」を通して面接の基礎を一緒に学んだ。後に事例検討会の発表にその成長が間近に感じられた時はとても嬉しかった。札幌学院大学の大学院生の吸収力と素直さは本当に財産であると思う。

一方、研究科の先生方には、大学院および心理臨床センターに関わりつつ、ご指導いただくとともに様々な苦勞を共有していただいたことには本当に感謝している。

私が勤務前には、清水信介先生、小山充道先生、滝沢広忠先生の3先生が札幌学院大学人文学部の臨床心理学の基礎を創られていた。札幌学院大学に最初に伺った時、日当たりの良い一角に心理臨床センターが設置されていることは大学全体の中でも大きな意味があると受け取られ、大学全体の信頼と期待が背景

にあることを想像したことを思い出す。言葉にして語られることは少なかったが、創設期の3先生のご尽力があつてのことと推察している。清水先生は箱庭療法をはじめユング心理学に造詣が深く、小山先生は脳障害の心理療法の第一人者、滝沢広忠先生は人間性心理学に詳しい。続いて精神医学の小片基先生、臨床心理学の池田光幸先生、発達臨床心理学の奥平洋子先生が大学院開設のために赴任されることによって大学院研究科の基礎ができあがった。

2001年に私と岩壁茂先生は同期に着任した。岩壁先生はカナダのマギル大学からの赴任で、北米の臨床心理学にも明るく豊かな知識をお持ちであった。私は大学相談室や子どもの療育教室、精神科の病院での心理検査と中学校での学校臨床の経験が少しずつあつたものの、大学で教えながら心理臨床活動に取り組んだ経験には乏しく、とても心もとない気がしていた。端的に言えば「知識の伝授—教える顔」と「悩みの相談—気持ちに添う顔」とが自分の中であまりにも違うので、同じ場所で短時間にこの二つを使い分けることができるかととても不安であった。研究科の先生方のご支援もあつたが、何よりも同期の岩壁先生が狭い日本の考え方にとらわれない方であつたことは私にとってとても幸運であり、授業もケースも試行錯誤を重ねながら体験してみようと思ふことができた。

さらに翌年には中原睦美先生が加わって下さった。彼女のカウンセリングに対する真摯な姿勢には学ぶことが多く、時には美味しい紅茶を頂きながらケースや事例検討会について語り合ったことはとても貴重な時間であった。河合隼雄先生を心理臨床センターの拡大事例検討会にお招きした折には中原先生のターミナルケアのケース発表を聞くことができた。「臨床」が「死の床に臨む」活動であることを実感した先生の体験を多少とも共有させていただき、河合先生からコメントを頂いたことは大学院生にとってもわれわれにとっても、とても有難い経験であった。

その後に着任された先生方にも様々な専門分野でご指導頂いた。安岡啓先生は北海道の力動的精神医学・精神分析の要として多くの医師や臨床心理士を指導されている精神科医であるが、とても気さくなお人柄でいつでもオープンに相談でき、また難解なフロイト派の理論でも先生が説明されるととても親しみが持てる。一方、伊藤則博先生は自閉症等障害児教育の専門家であり、長年その家族の傍らで一緒に考えた経験豊富な方である。障害児のお母さんが先生に相談した後、とても安心されるのを間近に見せていただいた。

橋本忠行先生は、どんな仕事でもフットワーク軽くこなされることが印象的であり、若手サラリーマンに対して先生ならではの暖かな面接をされておられたことが思い出される。当時心理検査をどのようにフィードバックするかについて真剣に取り組んでおられた。また、佐野友泰先生はコラージュや光る泥ダango、パペット遊び等、表現療法の分野で豊かなアイデアを持っておられる。大学院生が、なかなか自発的に語らない高校生の面接に苦慮していた時、先生から教えていただいたアメリカンフラワーを取り入れることによって関係づくりに役立ったこともあつた。

さらに、井手正吾先生には、ケースを通じてMMPIとロールシャッハ法など心理検査による見立ての仕方を学ばせていただいた。先生は片口安史先生のお弟子さんとして「心理診断法」の行間にある精神とその気迫ある姿勢をわれわれに分かりやすく伝えて下さった。クライアントのためなら努力を惜しまない臨床の姿勢は院生がぜひ学んでほしいところである。

このように研究科の指導をしていただいている先生方のご自分の専門領域だけではなく、幅広く「人間」を探求し理解を深めておられ、私自身大学院生と一緒に多くのことを先生方に学ばせていただいた。時にはケースや心理検査について個別にご教示頂いたことをとても感謝している。私が札幌学院大を離れた後も、市川啓子先生、田形修一先生、寺沢英理子先生、横山太範先生など、それぞれ臨床実践をていねいに積み上げて来られた先生方に大学院生がご指導頂いていることはとても嬉しくありがたいことである。

## 心理臨床センターの広報・研修活動について

勤務当初の心理臨床センターは人の出入りがあまり活発ではなかった。心理臨床センターと廊下を隔てたお隣は考古学の実習室であった。私は時折展示されている古い壺や展示品独特の匂いが好きで、古い品々の話を研究助手の方から聞くことを楽しみにしていたが、考古学が過去の人が使用した物を調べてその生活を推し量るのに対して、臨床心理学は現代に生きる人が自分の歴史を自ら作り出す場でなければならない。臨床実践現場としての心理臨床センターが人と人が活発に交流する「生きている場所」になるよう努力したいと強く思った。

心理臨床センターが活気ある場所になるためには、地域の人々に心理臨床センターの存在を知らせ、相談が必要な人に足を運んでもらわなければならない。まず、ここに相談室があることがどのようにしたら伝わるのだろうか、心理臨床センターが世間に認知してもらえるにはどうしたらよいだろうか…。地方自治体が出している情報誌に掲載してもらったり、パンフレットを保健所や学校など公的機関や病院などに置いてもらうことの他に、何かよいアイデアはないだろうか…。

広報活動の一貫として、思いついたのが「心の手帳」というミニ広報紙の発行であった。心理臨床センター研究員（教員）の人となりや大学院生を身近に感じてもらいたい、そのためには手作りの味を出すようなものが適切ではないだろうか…当時心理臨床センター長だった小山充道先生に「ネーミングは心の手帳にしたいです」と多少興奮気味に話したことを覚えている。

「心の手帳」の制作・編集・発行の作業は、心理臨床センターの実質的な広報活動として継続できるように願いつつ、教員や院生にとってあまり負担感のないように小さなサイズのものとし、エッセイ等を掲載して毎年2～3回発行することにした。近隣の学校の保健室や保健所、精神保健センターや小児科・精神科などの病院にパンフレットと一緒に置いてもらうと少しずつ反響があった。中村深雪さんにコーディネートしていただきつつ、大学院生の取り組みとしてスケジュールを立てながら編集等行っていたが、今でも年2～3回の発行が継続されており、それをホームページでも見ることができてとても嬉しく思っている。

さらに、心理臨床センター主催の教師向けの夏期講座については中原睦美先生と一緒に企画した。小・中・高校の教師に対しては、臨床心理学を通して自分自身の視野を上げ、子どもの理解を深めて幅広く関わることのヒントが得られること、そしてスクールカウンセラーや大学院生に対しては教師の仕事に対する理解を深めることを目的とした。発達障害や不登校をテーマとして話し合うシンポジウムの他、事例の検討の時間には日頃教師が困っている事例を出していただいて話し合った。講師には北海道内外の大学教員やスクールカウンセラーの他、教育委員会指導主事や養護教員なども招いて詳しく現場のお話を聞く機会とし、私たちにとても良い勉強の機会となった。講座を受講された教師からケースを紹介されることもあり、特に地域の小中学校・高校から相談の紹介が増加したことはとてもありがたかった。

## おわりに

以上のように思い出を綴っていくと自然に色々な人のお名前が出てきて、あらためて自分自身が様々な人々のおかげで今まで来たことをあらためて確認する作業となった。そして、札幌学院大心理臨床センターは直観的に様々な取り組みを選択したり試みたりすることができ、ずいぶん恵まれた環境だったとあらためて感じている。たとえば、人とのコミュニケーションがうまくいかず就労への不安を訴える男性のクライアントに対しては、大学院生数人が本人面接を引き継ぎながら数年にわたって担当する一方、筆者が家族面接を継続したり病院への連絡を担当することによって、長期にわたって関わることができた。さらに、初老期女性のクライアントに対しては了承を得て大学院生の陪席を継続させてもらったこともあった。

こういったケースでは、大学院生との関わりを深めることがクライアントの力を引き出すことに役立つ

たことが印象的であった。つまり、クライアントにとっては、面接の相手が修行中であるとの自覚が働いて、気軽に感情を吐露できるもののそれほど深くは退行せず、自分よりも若い面接担当者に自分の経験を語ることによって何かを伝えたいという動きが強まったようである。クライアントが面接の後、センター受付で料金を支払いながら、受付のカウンター上の金魚・人形・折り紙、さらに外の景色に託して、気持ちをほぐしながらほどよく現実指向的になって帰られる姿には、従来の個人臨床の枠組みにとどまらない、〈ゆとりの空間〉の癒しの体験をされたことが感じられた。

臨床心理学の分野では「あやまちから学ぶ」ということができる。「思った通りにはならないがやった通りにはなる」との格言のように、実際にやってみて、はじめて自分自身の気持ちが分かったと実感することも多い。しかしながら筆者の思いつきに近い着想で色々と試行錯誤をせざるを得ない事態に陥り、センター研究員の先生方や非常勤相談員の皆さんを慌てさせることも多かったのではないかと思ひ、深謝する次第である。

ほどほどの明るさ、広さ、暖かさ、そして試行錯誤の許される〈ゆとりの空間〉私にとってセンターの空間は外に開かれつつ内面が充足する…そんな空間であった。札幌学院大学心理臨床センターが今後とも北海道の臨床心理学の中心地として臨床心理士を育てる場であるとともに、社会に出て活躍する同窓生が時折立ち寄って研鑽を深める場として、さらに充実していくことをお祈りしている。